The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スインディー語の表記法についての一考察
Author(s)	萬宮, 健策
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2009, 1, p. 205-215
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/6279
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スィンディー語の表記法についての一考察

萬　宮　健　策
MAMIYA Kensaku

Abstract:

Writing System of the Sindhi Language

The Sindhi language is spoken in south-eastern area of Pakistan and surrounding areas in India by about 25 million. This language belongs to Modern Indo-Aryan languages of Indo-European Languages.

The Sindhi language is written in Arabic script consist of 52 characters in Pakistan and Devanagari script is also used in India. Many Sindhis living in India think that the Sindhi should be written in Arabic script, in spite of that they are not accustomed of using Arabic one.

Which script should be used for the language ? It can be said that Arabic script does not suit for writing of Modern Indo-Aryan languages such as Sindhi or Urdu from the linguistic viewpoint. The Sindhi language has open syllabic structure, but Arabic script cannot write vowels in the midst and the end of any word. The writing system of the Sindhi language is reviewed in this article linguistically.

The writing system for the Sindhi was adopted in 1850's. While some of English linguists and scholars insisted on the usage of Devanagari script, the then Government decided on Arabic script according to the opinion of other officers and natives. The main reason was that many of them were Muslims and they preferred Arabic script.

Nowadays Sindhis are of the opinion that writing their own language in Arabic script means that the script is a part of their culture and history. It is not a matter of importance that the script suits for the language linguistically or not. It may be said that the Arabic script does not suit for the language from the viewpoint of the sound system. But the script expresses not only the language itself, but its culture, history and background of the language.

Keywords：Sindhi, script, Modern Indo-Aryan Languages
キーワード：スィンディー語，文字，現代インド・アーリヤ諸語

1．はじめに

スィンディー語（Sindhi）は，南アジア地域で話されているインド・ヨーロッパ語族の中の現代インド・アーリヤ諸語（Modern Indo-Aryan Languages）の１つに数えられる言語である。話者人口は約 2,500 万人程度とされ，その多くはパキスタンとインドに居住している。

パキスタンもインドも多民族多言語国家であり，彼らの多くは，複数言語を使い分ける日常生活を送っている。スィンディー語が州公用語の１つに制定されているパキスタンのスィンド州を除いては，公的な場所でスィンディー語が用いられる機会はほとんどない。多くの場合，家庭内言語として用いられている。そのため，特にインドでは，若年層を中心に学習意欲，使用頻度ともに減少傾向にあり，印パ分離独立によるインド側への移住を体験した世代を中心に，教育，保護運動に力を入れ始めている。

スィンディー語を表記する際，パキスタン側ではアラビア文字が，インド側ではアラビア文字に加え，デーヴァナーガリー文字も併用されている。これは，パキスタン側の話者の多くがムスリム（イスラーム教徒）であり，インド側にはヒンドゥー教徒が多いという背景と関係があるほか，インドではインド政府によるデーヴァナーガリー文字使用推奨策の推進も考慮に入れなければならない。

本稿の目的は，スィンディー語の表記法をめぐる問題を明らかにし，アラビア文字で表記する際の問題点を言語学，音声学の側面から再考することにある。スィンディー語は，上述のとおり，インド国内ではデーヴァナーガリー文字でも表記されるが，本稿では別に断らない限り，アラビア文字によるスィンディー語を扱うこととする。これは，後述するように，19 世紀半ばに制定された正書法でのアルファベットがアラビア文字によるものであり，現在もそれが通用していることによる。

なお，本稿中で用いる転写表記は，文字ではなく，記号の１種であると考え，小文字のみを用いている。また，転写記号か，英語なのかが紛らわしい場合，転写記号は斜体字で示すこととした。

2．正書法確立に至る経緯

スィンディー語の歴史には明らかでない点が多い。現代インド・アーリヤ諸語に属することは明らかで，ヴラーチャダ・アパブランシャ[1]にその起源を遡ることができると言われている。10 世紀頃までさかのぼることができるという主張もあるが，異議を唱えるものが多く，正確な歴史は不明のままである。その理由として記録がほとんど残っていないことが挙げられる。19 世紀初頭まで，スィンディー語には特定の文字がなく，異なる階層やグループが，それぞれ別の文字を用いていた。たとえば，スィク教徒は，スィンディー語の表記にもグルムキー文字（後述）を用いていたし，19 世紀半ばに出版されたジョー

1　文語であったサンスクリットが，プラークリットと呼ばれる口語に変化し，その後 10 世紀中期頃になって発達し始めた口語の総称。地域によりさまざまな変種があったと言われる。

ジ・スタック（Capt. George Stack, ?－?）のスィンディー語文法（後出）には，地域ごとに異なる文字の一覧が掲載されている。シカールプール[2]ではシカールプール文字，タッタ[3]ではタッタ文字という具合に，異なっていた。地域や信仰する宗教が変われば，表記も変わっていたということになる。

上記のような背景を経て，スィンディー語の正書法は，1852年に確立した。現在のスィンド州を形成している地域の大部分は，1843年のミヤーニーの戦いにより，英領インドに併合された。それを機に，イギリス人による英語教育の波がこの地域にも押し寄せたが，スィンディー民族はそれに対抗する姿勢を見せた。同時に，イギリス側の役人に対する地域言語を教育する必要性とも相まって，スィンディー語もその研究対象となった。この時期から，正書法も含めてスィンディー語研究が急速に進み始めた。これより前のスィンディー語には，上述のとおり，統一された文字はなく，さまざまな宗教，社会階層等が，さまざまな文字を用いて表記していた。最終的にアラビア文字が採用された背景には，使用者人口の多くがムスリム（イスラーム教徒）であったこと，イギリス人の下で働くことになる多くのムスリムの名前の表記が，アラビア文字以外ではうまく表記できない，と考えられたことと関係がある［Schimmel 1974：26－27］と言われている。

これに対して，スタックやアーネスト・トランプ（Ernest Trumpp, 1828－1885）といった，19世紀半ばに英語によるスィンディー語辞書，文法書を残した研究者の多くは，デーヴァナーガリー文字採用を推奨していた。言語学的観点に立てば，アラビア文字はスィンディー語（をはじめとする北インドの諸語[4]）の表記にはなじまない，という点が彼らの主張であった［Schimmel 1974：26, baloc 1992：13－14］。中でも，トランプは，自著の中で以下のとおり明記している［Trumpp 1986（1872）：1］[5]。

> No alphabet suits the Sindhī better, than the Sanskrit alphabet, the Sindhī being a genuine daughter of Sanskrit and Prākrit.

イギリス人研究者やスィンディー民族を含めてのこうした議論の後，最終的に採用されたのが，52文字のアルファベットである。この文字の制定には，フレアー卿（Henry Bartle Frere, 1815－84）が尽力した。19世紀半ばには，スタックやトランプなどのデーヴァナーガリー文字推進派と，フレアーやリチャード・バートン（Sir Richard Francis Burton, 1821－90）[6], B.H. エリス（B.H. Ellis, ?－?）などのアラビア文字推進派が激しい議論を戦わせたことが記録に残っている［baloc 1992：12－13］。当時スィンド総督であった

2　現スィンド州北部の街。

3　現スィンド州南部の街で，南アジアに初めてイスラームがもたらされた場所としても知られる。

4　ここで言う「北インド諸語」とは，現代インド・アーリヤ諸語（インド語派）に属する諸言語を指す。

5　こうした主張にもかかわらず，同書では，一部でアラビア文字とデーヴァナーガリー文字が併用されている以外は，文法説明部分はアラビア文字が用いられている。

6　ミヤーニーの戦い（1843）で知られるネイピアー（Charles James Napier, 1782－1853）のもとで軍人として仕えつつ，スィンド滞在中の詳細な記録（Sindh and the races that inhabit the valley of the Indus, Karachi：Oxford University Press（1973. reprint ed., 1st. 1851））を残したことで知られる。

フレアー卿により，スィンディー語の豊富な子音に対応した新たな文字がアラビア語のそれに加えられた。その特徴は基本となる文字に１つないし３つの点（dots, nuqtā）を加えることで，もとの文字が持つ音価に近い音を表している点である（スィンディー語アルファベットおよびその音価については，資料を参照）。また，ウルドゥー語がナスターリーク体（nasta`līq）を用いるのに対し，スィンディー語はアラビア語と同様ナスフ体（nasx）を用いることもこの際に決められた。ナスターリーク体ではなく，ナスフ体が採用された経緯については，詳細は不明である。近隣のウルドゥー語やパンジャービー語を初めとする，パキスタンの他言語がほぼ例外なくナスターリーク体で表記されていることを考えると，あえてナスフ体を採用したのには何か理由があったと考えるべきであろう。この点は今後の課題としたい。

正書法制定をめぐっては上記のような背景があったが，結局は，この言語の話者の多くがムスリムであった点が考慮され，ムスリムなら聖クルアーンを読めなければならない，そのためにはアラビア文字の知識が必要である，したがってスィンディー語もアラビア文字で表記すべきである，という考えが，基底にあったと考えられる。

３．アラビア文字の特徴

複数のイギリス人研究者が，アラビア文字は北インド諸語にはなじまない，と主張した根拠は何だったのか。ここで改めてアラビア文字の特徴を整理しておきたい。パキスタンでは，正書法が確立しているかどうかを別にして，また，言語系統にかかわらず，ほぼすべての言語がアラビア文字により表記されている。これは，パキスタンの総人口約１億3500万[7]の97％程度がムスリムであることと関係があると考えられる。また，周辺地域でも，ムスリムが用いる言語は，その言語学的な系統にかかわらず，アラビア文字で表記するものが多い。話者にムスリムが多い言語は，アラビア文字で表記されていると指摘できよう。

アラビア文字の最大の特徴と指摘できるのは，母音を示す補助記号なしには，語中や語末の短母音が原則として表記できないという点である。たとえば，/pasand/ という語彙を例に挙げる。アラビア文字でこの語彙を表記すると，/p/，/s/，/n/，/d/ の子音を示す４文字が並んでいるだけで，どの位置にどんな母音があるのかは，この語彙を知らないとわからない。逆に言えば，知らない語彙は決して読めないのである。この点は，スィンディー語などを表記する際の最大の障害となる。それが詩作の場合には，その韻律により正確に発音できる場合もある［山根 2007：36］が，散文などの場合には，発音を知る手立ては，補助記号以外にはない。

また，同音異字の多さも，アラビア文字による表記の特徴である。アラビア語では異なる音を表す文字が，スィンディー語をはじめとする現代インド・アーリヤ諸語では，同音異字になっているものがある。しかし綴り字の上ではアラビア語でのそれを維持しているため，音声，発音から元の綴りを復元させることが困難な場合が多い。そのため，実際に

7　1998 年実施の国勢調査結果による。

インドでは，発音どおりに簡略化して表記しようという動きが広がったこともあった。たとえば，ウルドゥー語の以下のような綴りがそれに該当する。

原綴り　صحیح /sahīh/　→　発音に近い表記　سہی /sahī/[8]

ただし，この動きは定着せず，上記の発音に近い表記は，正書法では正しくないとされる。

（1）スィンディー語アルファベット

スィンディー語は，上記正書法で定められた52文字からなるアルファベットで表記される。スィンディー語には鼻子音や内破音など，周辺の現代インド・アーリヤ諸語と比較しても豊富な子音があり，それぞれの音を表記するためのアルファベットが必要となる。スィンディー語アルファベットの特徴として，ウルドゥー語のそれに比較すると，「一音一文字対応」というアルファベットの原則により近くなっていると指摘できる。次節で見るとおり，ウルドゥー語では補助記号を用いる形で帯気音（aspirated sounds）が表されるが，スィンディー語では，近い音価を有する文字に手を加えて新たな文字を作り出している（末尾対照表を参照）。

この点は，ウルドゥー語のアルファベットと比較した場合，統一感に欠けるようにみえてしまう。たとえば，上記帯気音を示す文字を例にとってみよう。スィンディー語には，/p^h/，/b^h/，/t^h/，/d^h/，/$ṭ^h$/，/$ḍ^h$/，/$ṛ^h$/，/c^h/，/j^h/，/k^h/，/g^h/[9] の11種の帯気音があるが，このうち，ウルドゥー語と同じように補助的な文字を用いて表されるもの（２文字の結合）が３種類，スィンディー語特有の１文字で表される文字が８種類ある。また，２文字の結合で表される文字のうち，２つのみがアルファベットとして数えられ，残りの１つはウルドゥー語と同様，アルファベットの合計には含まれない。それ以外では，/k/ と /k^h/ を表す文字の外見上の差異が小さく，場合によっては判別が困難となろう。
それ以外でも，スィンディー語の正書法に従うと，/gahā/ と，/ghā/ の綴りは同一となる。これは，子音 /h/ を表記する文字と，帯気音化させる記号とが同一であることにその理由がある。

また，アラビア文字を使う場合，原則として語中，語末の短母音を原則として表記できないため，スィンディー語のような開音節終わりの言語では，ウルドゥー語以上に正確に読むことが困難となる。デーヴァナーガリー文字が，それぞれ単独で /a/ を内包しているのに対し，アラビア文字の各文字は母音を含まないため，各語彙のどの位置にどんな短母音があるのかは，覚えなければならない。ただ，スィンディー語の音節構造の原則を知ることで，母音の有無だけは判断できる場合がある。

8　ウルドゥー語では，語末の /h/ は実際には聞こえにくい場合が多く，この語彙がアラビア語からの借用語で，最後に /h/ を示す文字があることを知らなければ，誤って綴る可能性がある。普段からアラビア文字に接する機会が少ない場合には，綴りを誤る頻度が高くなる。

9　上付文字の h は，直前の子音の帯気音化を示す。

مهرباني という語彙を考えてみよう。文字上では，/m//h//r//b//ā//n//ī/ という７つの音価が示されている。スィンディー語の音節構造をこの語彙に当てはめてみよう。語頭には子音重複が起きず，また語頭の短母音がある場合には，それは必ず表記される。この語彙の場合，語頭に母音字がないことから，/m/ と /h/ の間には何らかの母音があることがわかる。また，音節が重複子音で終わることもないので，/h/ と /r/ の間にも何らかの母音があることがわかる。この語彙は，標準スィンディー語では /mihirbānī/ と発音されるが，音節構造という観点からは母音の有無が判断できるのみで，それがどの母音かは，やはり知らないとわからない。なお，語末が短母音である場合，その語彙が名詞（および名詞相当語）なら，その短母音は格変化の役割を担っているため，綴り上では差がない語彙でも，文法にしたがって，母音の判別をすることができる場合もある。

母音を示すための補助記号については，基礎教育用の教科書では用いられる場合が多い。しかし，省略不可能な幾つかの記号を除いては，学年が進むにしたがって頻度が減り，一般的には用いられることは少ない。

（２）ウルドゥー語およびパンジャービー語のアルファベット

ウルドゥー語とパンジャービー語のアルファベットはほぼ共通である[10]。反舌鼻音を示すںが[11]，パンジャービー語では追加されるが，それ以外のアルファベットは共通となる。このアルファベットでは，帯気音を表すためのマーカーとして，ھが別の文字とともに用いられる。この文字の直前の子音を帯気音化させる役割を果たしている。一文字一音という原則からは外れるが，逆に言えば，この文字がある場合必ず帯気音であることがわかる。この点がスィンディー語のアルファベットと大きく異なる点である。また，ナスターリーク体を用いる点も，スィンディー語と異なる点である。ウルドゥー語の正書法が決められた歴史的経緯については，［山根 2007］が詳しく，ここでは詳細は割愛する。詩作の場合には，その音節構造や韻律をもとに，母音の有無の判断がある程度可能なのは，スィンディー語の場合と同じである。

（３） デーヴァナーガリー文字

現在，ヒンディー語やネパール語などの表記に用いられているデーヴァナーガリー文字は，インド国内ではスィンディー語表記にも用いられている。スィンディー語の内破音４種を表記するために，音価が最も近い文字に下線を付した文字が追加されているが，それ以外の多くの音素は新たな文字を付加することなく表記することができる。また，すべて

10 パンジャービー語（*panjābī*）は，パキスタンのパンジャーブ州およびインドのパンジャーブ州を中心とした地域で話される，現代インド・アーリヤ諸語の１つである。本稿で扱うパンジャービー語は，パキスタン側のパンジャービー語で，アラビア文字（シャームキー文字（*šāhmukʰī*）とも）で表記されるものを指す。パンジャービー語も，スィンディー語と同様，２種類の文字で表記される。インド側のパンジャービー語は，主にスィク教徒によって用いられ，グルムキー（*gurumukʰī*）文字を用いて表記する。

11 パンジャービー語の表記には揺れが残っており，反舌鼻音にはこの文字を用いる場合と，この文字に点２つ（dots）を縦に並べたものを付加する文字を用いる場合とがある。

の母音を表記することができ，文字を覚えれば，意味はわからなくとも，正確に発音することが可能となる。この点が，スィンディー語の正書法制定時にイギリス人研究者が，デーヴァナーガリー文字を採用すべきと主張した根拠である。

４．転写表記をめぐる問題

上述のとおり，スィンディー語のみならず，アラビア文字を用いて表記される南アジア地域の諸言語に共通する問題として，「読むことが困難である」点が挙げられる。このことはそのまま言語の地域差，方言差となって現れる場合もある[12]。こうした言語を外国語として学習する場合，文字を習得するまでの補助手段として，しばしばローマ字による転写表記が用いられる。本項では，この点に関して触れておきたい。

従来，南アジア地域の諸言語のローマ字転写は，さまざまな方式が採られてきており，その規則が決められているわけではない。音価が近いローマ字を用い，あるいはそのローマ字に手を加えることにより表されてきた。これまでは，アラビア語の転写規則を踏襲する場合が多かったが，この方式は，転写記号を見ればもとのアラビア文字での綴りが再現できることを念頭に置いた方式であると言える（たとえば『岩波イスラーム辞典』（岩波書店）の方式を参照）。しかし，南アジア地域の諸言語では，上記のとおり，同音異字が見られるため，任意の語彙の発音を知る目的のための転写記号に，アラビア語で用いられてきたいわゆる伝統的な転写表記の規則をそのまま適用させると，ローマ字に付加される各種記号が煩雑となる。それに加えて比較的子音音素の豊富なインド・アーリヤ諸語を転写表記するために，さまざまな工夫がなされ，いっそう複雑なローマ字転写となる。もちろん，もとの綴りが容易に再現できるという点では，従来からのアラビア語の転写規則は優れているが，実際にアラビア文字での綴りが目の前にあって，その読み方を知るための転写記号は，より簡略化できる可能性がある（たとえば『基礎ウルドゥー語』（大学書林）の方式を参照）。スィンディー語をはじめとする現代インド・アーリヤ諸語では，アラビア語にはない子音が多数あるため，それらを転写するための規則は考案されなければならないが，読み方を知るための転写記号という目的を前提にすると，同音異字にあえて別の記号を割り当てる必要性はないという考えもできるのではないだろうか。

なお，コンピュータ上での言語，文字処理を前提に考えると，すべての文字を区別する必要があるため，従来のアラビア語転写の原則を念頭にすべきである。ただし，入力の手間を考える場合，可能な限り，アルファベットの原則でもある一文字（キー）一音対応とすべきで，この点でも現行の転写記号はどれも改善の余地が残されていると指摘できよう。コンピュータ上でスィンディー語を入力，処理するための環境は整いつつあるものの，キーボード上の文字配列などにもばらつきが見られる。統一する必要はないが，ほかの現代インド・アーリヤ諸語との汎用性はある程度考慮されるべきであろうという点は指摘して

12　たとえば，「それ以外に」という表現は，/us ke `alāwah/ という発音と，/us ke `ilāwah/ という発音がある。アラビア文字では同じ表記だが，この発音の差は地域差であると言われる。

おきたい。

5．結びに代えて

音節構造など，純粋に言語学的な観点に立ってみれば，スィンディー語の表記には，現行の文字から選択する場合，デーヴァナーガリー文字の方が，アラビア文字より適していると言える。しかしながら，最終的に，話者数で勝ったムスリムたちにとって，よりなじみのあるアラビア文字が採択される結果となったのは，上記のとおりである。ある言語をどのような文字で表記するのかということは，言語学的な要因だけで決めることはできないことの証左でもあろう。

ところで，表記をめぐる問題では，次のウルドゥー語とヒンディー語の例も非常に興味深い。たとえば，次のような会話がなされている場合，この両者は何語を話しているのか，どこで判断されるだろうか。

A：āj āp kyā kareṅ ge？（今日はどうするの？）

B：āj maiṅ g^{h}ūmne phirne bāhar jāūṅ gā. aur āp ka kyā progrām hai？

（今日はあちこち見て歩くつもりなんだ。で，あなたはどんな予定？）

ウルドゥー語とヒンディー語の差異についてここでは深く論じないが，少なくとも上記のような日常会話に関しては，音声面では全く差異がない場合が多々ある。極端な例を挙げれば，ウルドゥー語を学んだものAが，上記の文をデリー市内旅行中に用いれば，多くの場合，それを聴いた相手Bはそれをヒンディー語として理解し，返事をするだろう。また，ヒンディー語を学んだものAがカラーチー市内で上記の文を用いると，聞いた相手Bはそれをウルドゥー語と認識する。表記の面から考えると，上記の文をアラビア文字で表記すればウルドゥー語，デーヴァナーガリー文字で表記すればヒンディー語と，一般的に認識される。一方，パキスタン国内での発話は無意識のうちにウルドゥー語と理解され，インドでは同じ発話であってもそれをヒンディー語と理解するものが多いという現象は非常に興味深い。表記する文字が言語を限定することがあると言える好例であろう。両者間の差異については，歴史的，政治的な問題も絡むため，機会を改めて考えることとしたい。

スィンディー語の場合は，それをアラビア文字で表記しようが，デーヴァナーガリー文字で表記しようが，「スィンディー語」と称される。パキスタンではアラビア文字のみが通用しているので，問題になることはないが，インドでは両方の文字が併用されており，どちらの文字を用いるのかでしばしば議論となる。

ムンバイーなどスィンディー民族多住地域では，アラビア文字を用いようとするものが多いのに対し，デリーに居住するスィンディー民族の中には積極的にデーヴァナーガリー文字を用いようとするグループがある。スィンディー民族は信仰する宗教による差別が比較的少ないことでも知られるが，彼らが主張するのは，自らの言語や文化の中心が現在でもパキスタン側にあり，そこでアラビア文字が用いられているのだから，自分たちもそれにしたがうべきだという点である。一方，デーヴァナーガリー文字を積極的に用いようとするグループは，先述した，インド政府のデーヴァナーガリー文字使用推奨方針に従おう

という立場にある。その背景には，インド国内でのスィンディー語の立場が決して盤石ではなく，政府からの支援が必要であるという点も見え隠れしていると考えられる。

南アジアでは，ことあるたびに信仰の違いが争いの種になりがちである。しかし，現インド側に居住するスィンディー民族の多くはヒンドゥー教徒であって[13]，日常生活ではアラビア文字に接する機会がほとんどなくとも，自らの母語はアラビア文字によって表記されるべきであると考えている。そこに，言語学的に考えると難点が多いから，文字を変更すべきだという考えが生まれる余地は，これまでのところ，ない。アラビア文字で表記することがスィンディー語「らしさ」を生んでいるのであり，長い文学伝統や文化を表記できるのは，アラビア文字を置いてほかにはない，という，理論だけでは割り切れない考えが，紙メディアによる活発な出版活動だけでなく，電子メディアやコンピュータ上でのスィンディー語の発展を支えていると言えよう。

〈追記〉

本稿は，平成19年度科学研究費補助金（萌芽研究)「スィンディー語をとりまく言語状況に関する研究」(課題番号：19652037)の研究成果である。

(注記)

資料１の対照表では，スィンディー語（s)との比較という観点から，便宜的にウルドゥー語（u)もナスフ体で示している。一般的にはウルドゥー語の表記にはナスターリーク体が用いられる。また，本表で用いた転写記号は，２言語の対照のために，可能な限り１音１文字対応となるよう割り振られている。両言語で文字が異なるものは，通し番号を斜体字とした。

１　スィンディー語アルファベットの３行目とウルドゥー語アルファベットの11行目は空欄になっているが，これは両言語でアルファベットの順序が異なるためである。音価 /p/ を示すアルファベットは，それぞれのアルファベット順にしたがい，スィンディー語では11行目，ウルドゥー語では３行目となる。

２　ウルドゥー語アルファベットのうちこれらの文字10個は，２文字の結合であり，通常アルファベットの数には含まれない。本表ではスィンディー語アルファベットの対照として掲載している。

3－6　これらの文字は，アラビア語では異なる音を表すが，スィンディー語やウルドゥー語では同一の音を表す同音異綴文字となる。

７　これらの文字は，半母音，母音を表し，語彙ごとにその読み方が異なる。

29番目の文字は，ウルドゥー語でのみ用いられる。

13　現インド側に居住するスィンディーのほぼすべてが，印パ分離独立を機に，現パキスタン側から移住したヒンドゥー教徒とその子孫である。

(資料１)アルファベット一覧

スィンディー語・ウルドゥー語アルファベット対照表

転写	S	U		転写	S	U		転写	S	U	
ğ	غ	غ	37	x	خ	خ	19	母音	ا	ا	1
f	ف	ف	38	d	د	د	20	b	ب	ب	2
p^h	ڦ	پھ 2	*39*	d^h	ڈ	دھ 2	*21*	p	ٻ	پ	3
q	ق	ق	40	dd	ڏ		22	b^h	ڀ	بھ 2	*4*
k	ڪ	ک	*41*	ḍ	ڊ	ڈ	*23*	bb	ٻ		5
k^h	ک	کھ 2	*42*	$ḍ^h$	ڊھ	ڈھ 2	*24*	t	ٽ	ت 3	6
g	گ	گ	43	z	ذ	ز 5	25	t^h	ٿ	تھ 2	*7*
gg	ڳ		44	r	ر	ر	26	ṭ	ٽ	ٹ	*8*
g^h	گھ	گھ 2	45	ṛ	ڙ	ڑ	*27*	$ṭ^h$	ٺ	ٹھ 2	*9*
ng	ڱ		46	z	ز	ز 5	28	s	ث	ث 6	10
l	ل	ل	47	ž		ژ	29	p	پ	1	11
m	م	م	48	s	س	س 6	30	j	ج	ج	12
n	ن	ن	49	š	ش	ش	31	jj	ڄ		13
ṇ	ڻ		50	s	ص	ص 6	32	j^h	جھ	جھ 2	14
v	و 7	و 7	51	z	ض	ض 5	33	ň	ڃ		15
h	ھ	ه 4	*52*	t	ط	ط 3	34	c	چ	چ	16
-	ء		53	z	ظ	ظ 5	35	c^h	ڇ	چھ 2	*17*
y	ي 7	ی 7	*54*	母音	ع	ع	36	h	ح	ح 4	18

参考文献

（洋書）

Aitken, E.H. 1986.（1st. 1901）*Gazetteer of the province of Sind*. Karachi：Indus Publications.

Allana, G.A.（Comp.）1998. *Papers on Sindhi language & linguistics*. Jamshoro, Pakistan：Institute of Sindhology, University of Sindh.

baloc, nabī baxs xān. 1992. *sindhī sūratxatī aiṅ xattātī*（*Sindhi script and orthography*）. haidarābād：sindhī bbolī-a jo bā ixtiyāru idāro（Sindhi Language Authority）.（in Sindhi）

Grierson, G.A.（Comp.）1968.（1st. 1919）*Sindhi language*. Linguistic Survey of India Volume VIII Part I. Delhi：Motilal Banarsidass.

Schimmel, Annumarie. 1974. *Sindhi literature*.（A History of Indian Literature Vol. IX,1）Wiesbaden：Otto Harrassowitz.

Stack, George（Capt.）. 1849. *Dictionary English and Sindhi*. Bombay：American Mission Press.

Tritton, A.S. 1983.（1st. 1943）*Teach yourself Arabic*. Kent, England：Teach Yourself Books.

Trumpp, Ernest（Dr.）. 1986.（1st. 1872）*Grammar of the Sindhi language*. Delhi：Asian Educational Services.

Yegorova, R.P. 1971. *The Sindhi language*. Moscow：“Nauka” Publishing House.

（和書）

鈴木義里，2002,「あふれる言語，あふれる文字：インドの言語政策」 右文書院.

萩田博，1996,「基礎パンジャービー語」大学書林.

町田和彦，黒岩高，菅原純（編），2003,「中国におけるアラビア文字文化の諸相」 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

---，2004,「周縁アラビア文字文化の世界―規範と拡張―」 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

萬宮健策，1994,「スィンディー語文法概説」,『東京外国語大学語学研究所語研資料 16』，東京，pp. 51－136.

山根聡，2007,「19 世紀初めインドにおけるウルドゥー語の正書法」,『京都大学西南アジア研究 No. 67』 京都，pp. 17－47.

（2008. 12. 22 受理）